

あるプロレスラーが、コロナ問題で試合ができない間に、バク転の練習をしている動画をツイッターに上げていた。その動作の自然さに目を奪われた。僕にはできない。

身体能力が優れた人をうらやましく思う。いや、疎ましくもある。スポーツに対する僕の思いはねじれている。小学校のとき、僕は体育だけが二で、あとは五だった。

勢いに任せる、ということについて考えてみたい。

僕は文章を書くのが仕事で、出任せに言葉が出てくる勢いはある。だが、それと引き換えであるかのように、身体運動の勢いが十分発揮できない。それはもともと能力が乏しいのだろうか。それとも何か抑制がかかっているのだろうか。母方の祖父は国体にも出た体操選手だったのだが、その遺伝子がどこかで迷子になっているみたいだ。

僕はしばしば身体と思考の拮抗（きっこう）について考えてきた。僕は「頭でっかち」なので（実際、物体として頭が大きいと思う）、その立場から見ての身体概念を作った。あるときそれは「頭空っぽ性」と呼ばれ、あるときそれは「意味がない無意味」と呼ばれた（いずれも『意味がない無意味』を参照）。前提として、身体と精神（思考）の対立がある。デカルトの名を挙げるまでもなく、古来存在する対立である。他方、身体と精神が相互に助け



バク転する 阿弥陀仏

千葉雅也
chiba masaya

合うような理論構成もありえ、僕はその方向へ行きたいのだが、対立がどうも硬直化しているようで、十分にその方向への勢いをつけられない。だから、バク転もできないのだろうか。そういえば、逆上がりもできなかったのだが、あるとき——それは夕方で、だいぶ暗くなった校庭だったと思う——何かがひらめいたように、できた。

僕の研究はこのところ、芸術の問題に向かっていて。芸術作品を「作る」、「制作する」とはどういうことかという問いである。これに関してあちこちでレクチャーを行ったが、そのたびに僕は、「我執から他力へ」と言って

いる。なぜか仏教の言葉を使ってしまうのである。信心があるわけでもないのに。

芸術とは「やらかす」ことだ。真に作品が生じるときというのは、作「ろう」としないときだ。自分でどうにかするというコントロール欲望、すなわち「我執」から離れたときだ。あるときに生じた勢いで、何事かを「やらかして」しまうのであり、「できて」しまうのである——家族計画のないセックス、あるいは不特定多数との危険なセックスのように。それは受精であり、感染である。自分が何かをなしたというより、あたかも自分が「他の力」、「他力」が通り抜けたような経験である。西洋古代にも、詩とは、神に憑（つ）かれて

我を忘れた狂気的狀態の産物だという見方があった。

「他力」という言葉を調べると、阿弥陀仏の力によって、という説明が出てくる。ところでソクラテスも、自分の思考は「ダイモン」に衝き動かされていると言っていたのだった。ソクラテスも他力の人だった。人を詩人にする神、ソクラテスのダイモン、阿弥陀仏には、何か構造的な対応関係があるのだろう。

宗教や哲学における超越的他者、それがどうもバク転と関わるような気がする。

僕は、一つの宗教に身を捧げることには懐疑的だが、諸宗教において神的、あるいは超越的なものとして言われる事柄は、人間の生にとって、非宗教的な意味において（広い意味で学的に、科学的に）重要であると考えている。

二種類の神がいる。ニーチェが『悲劇の誕生』で区別したように、秩序を形成する神（アポロン）と、破壊的なまでに力を解放する神（ディオニュソス）である。そして僕は今、自分のなかでこの二つの神性がどう関わっているのかを考えている。

宗教とは、人間の、他の動物に比べて過剰に発達した脳のあり方を反映した現象ではな

いだろうか。以下、その仮説を少し展開してみよう。

人間は本能が壊れている、などと言われる。というのは、他の動物とは異なり、人間は本能によって行動が十分に規定されておらず、基本的欲求に対して取りうる行動の可塑性が非常に高い、という意味だ。ある種の動物は決まった種類の食物しか食べないが、人間は食文化を複雑に発達させるし、断食やダイエットまで行う（つまり一見して本能に反することまで行うのであり、自殺もする）。また人間の性行動は、繁殖するという本能から逸脱して、多種多様な「倒錯」を花咲かせている。

本能レベルの「欲求」に対して、それを出発点にしつつも非常に可塑的であるものを「欲望」と呼び分けよう。人間の人間らしさは、欲求ではなく欲望にある。

欲求が満足され、それで済むのであれば、悩むことはない。人間、ホモ・サピエンスは、生物的条件として欲望の次元を有するから、悩むのである。ホモ・サピエンスは、いわば「過剰な認知エネルギーを余らせている」のであり、ブッダが狙いを定めたのもそこなのだろう。キリスト教の原罪概念もその言い換えであると考えられる。

欲望があるから、人間には多様な生・性がある。だが、欲望があるからこそ、ただ単純

に生きることには没頭できず、懊惱^{ウウ}し、そして、生きようとする本能からの派生態であるはずの思考のオーバーフローとして、自殺することもある。おそらく、生・性の過剰が死に繋がるのだが、このロジックがよくわからない。そこにフロイトは仮に「死の欲動」という概念を当てたのだと思うが、そのフロイトのテクスト、名高い「快原理の彼岸」は雑然としたもので、謎は残されたままだ。さらなる研究が必要である。

人間は、成長の過程で、過剰な認知エネルギーに対し、外から「粹付け」を強いられることで主体化していく。言葉。まず言葉の定義である。何かを見て、それが一定の音列と対応することを繰り返し刻み込まれる——そこに「なぜ」はない。言葉の刻印は強制であり、それ以上根拠のないドグマである。そして、ふるまいのコード化。やっていいこと、いけないことの区別。そこには一般的倫理もあれば、単にその家族だけの習慣もある。特定の価値観が、家族において、根拠なきドグマとして刻み込まれる。

ピエール・ルジャンドルは「ドグマ」という概念を、社会性の成立に不可欠の、前論理的な礎石として定義した。ドグマは、身体的なものであるとも言えるだろう。それは骨肉への、脳神経へのマテリアルな刻み込みなのである。

人間の過剰さ、そしてそれに対する有限化。前者にディオニュソスのものが、後者にアポロンのものが対応する。通常、多くの宗教では、アポロンの抑制的な面がドミナントであるように見える。宗教はしばしば「禁止」によって人間に平静をもたらそうとする。もちろん、荒ぶる神を言祝ぐ信仰もある。認知エネルギーの勢いを増幅し、人を脱主体化させ、別のものに委身させる神性。おそらく宗教一般において、この二極の拮抗が肝心なだろう。この二極が、単なる二元論ではなく、いかに精妙な「総合」をなすのが問題なのだろう。力が解放されること、ある形をなすこと。

プロレスにはさまざまな技があり、そのどれをとっても、僕には「これ以上は無理」という壁を通り抜ける力の溢れがなければできないことに思えるが、その溢れは、もちろんやみくもな暴発ではなく、相手の体との協働によって、ある一つの「技」と見なせる形、フォームを形成する。技から技へのモニタージュとしてのプロレスは、ディオニュソス的なものとアポロンのものの総合の劇に他ならない。

身体運動におけるアポロンの制御とはどういうことだろうか。それは、僕には把握するのが実に難しい。制御、コントロールとい

う意識を持つと、それはまず、力を全体として抑えるという大ざっぱなものになってしまう。本当に必要なのはディオニュソスの勢いの只中でのアポロンの制御なのだが、最初の段階でブレーキがかかってしまうのである。おそらく僕は、アポロンのもの、形態化の原理が、まだよくわかっていないのだ。

まだよくわかっていない……と言っても、四十を過ぎてからいまさらバク転もないだろうし、そもそも単純に身体能力に乏しいだけなのだとしても、僕には「身体を取り戻す」余地がまだあるという感じもする。そう、「身体を取り戻す」のである。このフリーズが自然に出てくる。身体が、どこかに置き去りになっている気がする。

力を抑えるのではなく、力を溢れさせながら形態化する。

だが、形態化「する」のではない。形態化も自己放棄だ。勢いに任せてディオニュソスの喧嘩になだれ込むのは自己放棄であるが、その只中で何らかの秩序化が「起きるに任せる」という自己放棄がある。

——だが、僕はこのことがどうもわかっていない。形態化は外的な有限性によって起こる。例えばツイッターの一四〇字以内、A4の紙一枚という、我執とは無関係な有限性がある

からこそ何か成り立つ、と僕は考えているはずなのだが、それでも意図的なコントロールが優勢になってしまう。

勢いに貫かれる、それは他力だが、そこで何かが成立するのもまた他力である。

プロレスは二人で行う。そこには、深い信頼がなければならぬ。いや、この「深い信頼」という言い方も欺瞞的で、正確には、信頼できない相手でも信頼しなければならぬ、というか、賭けなければならぬ。いや、「賭ける」というのにもまだ我執が残っている。どうでもよくなるなければならない。いや、「どうでもいい」というのにもまだ我執が残ってはいまいか。……ともかく、どうにかなるだろう、ということだ。プロレスの相手、他者、他なるもの、我を取り巻く環境、社会、大地、空気……が、受けとめてくれるはずなのだ。そこへジャンプする。この「そこ」。信頼でも賭けでもない、我から発するベクトルとしてではなく「そこ」に向かう、そこに呼ばれるようにしてそこへ行く。この「そこ」が、仏と呼ばれるのではないか。形はできる。気にしなくてよい。そして、きっと人はそう簡単には死なない。ただ他力に任せるというのは、生の肯定である。生のしふとさの肯定である。

人はなぜ死を恐れるのだろうか。「死を恐れ

る」ことのメタファーが、日常のいろいろな場面にある。交渉に失敗しないように書類を丁寧に書く。部屋のカギを締めたかどうか確認する。人の顔色をうかがう。こうしたことが空回りすると、強迫的行為である。遠くに死を見やっつて、潜在的な危険をことごとく取り除こうとしている。

だが、少し考えればわかることだが、人生を前もって完全に安全なものにすることなどできない。偶発事は起きるときには起きる。自分の責任で悪いことが起きたのか、偶然が重なっただけなのか、どんな事態であれ厳密に考えれば区別がつかない。その区別を決しようとするのが法的・公共的な思考だが、人生の無限のディテールを包摂する宗教や哲学は、その区別がつかないという別の思考を与えるところに存在意義がある。

死を恐れるというのは、自分のコントロールから外れた事態を認めたくないということだ。つまり我執である。自分が意識的に成立させる秩序ではない他の秩序、他力によって「生成する秩序」の側に行けない、ということだ。こうして考えていくと、問題はむしろ、勢いに身を任せるといふより、無心で他の秩序に飛び込むことであり、それが大事なのだが意外に難しい、ということなのかもしれない。

とうにかなる。信じること。そう、「信じ

る」。この言葉が自然と浮かぶ。

人を信じる。人だけではない。大地がこの足を受け止めることを信じる。世界を信じる。ドゥルーズの哲学には、あの世への信仰とは区別される、「この世界を信じること」というテーマがある。おそらく仏教も、一見超越的に思える言葉づかいをしていても、本質的には、この世界への「信仰ならざる信」を問題にしているのではないか。

とうにかなると思うまでもなく、大地に身を任せ、おのずと決まってしまうバク転。

人を信じ、世界を信じること。それが先で、そのなかに、自分を信じるのが包摂される。先に自分を信じ、自分という基準点から世界を見るのではない。我執から離れることが先で、逆説的にもそれによって取り戻されるような自己信頼がある。

人を信じられず、世界を信じられない……という感覚が、僕をカンタン・メイヤスの偶然性の哲学へと導いたのだろう。僕と友人たちが——信頼する友人たち！——翻訳したメイヤスの『有限性の後で』(人文書院、二〇一六年)によれば、この世界がこのようなあり方をしているという事実は何の(超越的)根拠もない偶然的事実であり、だからこのままであり続ける必然性はなく、いつ何時、別のあり方に変わるかもしれない。僕はこの主張を、世界はいつ「豹変」するかもわ

からない、と表現することがあった。僕はそこに人間の事態を読み込んでいる。人は裏切る、人は思っていたのとはまったく別の顔を持つているかもしれない、といった。けれどもメイヤスは、世界のそうしたラディカルな偶然性を認めることで、何を言わんとしたのか。

『有限性の後で』はそこが不明瞭に思われるのだが——いや、僕にとつて不明瞭なだけかもしれないが——、改めて強調すべきは、この世界はただ事実的⇨偶然的なものであるからこそ、だからこそこの世界の科学的研究が可能なのだ、とする態度である。世界に究極の根拠はない。究極の根拠へと遡行するのではなく、具体性の平面で展開される諸関係に内在して生き、考えるのである。

ただ事実的⇨偶然的な世界を生きる科学的な精神、それは「この世界への信」ではないだろうか。「空」といふ仏教的観念は、この事実性⇨偶然性のことではないのか。この世界に内在し、具体的なものを、人を、大地を、究極の根拠なしにただ生きる。ここにおいて、内在主義の哲学と、宗教と、ただ「事に当たる」科学が一致するのである。

(ちば まさや・立命館大学大学院教授
著書に、「勉強の哲学」(文藝春秋)など。